

「和」川柳社会報 六七四

定例会 二〇一八年二月二十六日(月)

定例会 於：金沢市金石町



白真弓さんも参加されている
レイバーネットから

またしても強行採決。

とんでもない安倍政権。

東京では連日のように

集会やデモ。多くの若

者が参加している。

速報 琉球新報

新知事に玉城氏



辺野古反対に支持
承認撤回、翁長氏を継承

「沖縄に新基地はいらない」の意志が示された沖縄知事選。安倍総理は「沖縄に寄り添っていく」と言いながら選挙直後に工事再開を指示。辺野古の海は人魚伝説・ジュゴン（絶滅危惧種）の棲息地。土砂投入はジュゴンを絶滅させる。(周)

◆ 目次

川柳互選

課題吟「実」

自由吟

ほのぼの川柳

自選一連作

プロレタリア文学運動の盲点

『土と兵隊』削除部分復活

シベリア抑留の記録②

故・秋山茂氏の手記

報告・後記

12月例会

12月24日(月)

投稿締切

課題「凍」

自由吟

自選句、自解筆もぜひよろしく。

今月秀句

土砂投入ジュゴンの海に死の呻き

亀公子

◆ 課題吟「味」

(互選) 一人3句以内吐

白真弓

宏

徹乗

未知子

立東爺

立東爺

広助

広助

未知子

白真弓

和子

一角

和子

大峰

林

徹乗

一角

白真弓

林

一角

大峰

広助

未知子

ダン吉

宏

ダン吉

立東爺

一角

ダン吉

龜公子

和子

4 戦争の味に繋がる芋の蔓 亀公子

4 九条の味に溢れた文化鍋 亀公子

4 安物でグルメを作る妻の腕 徹乗

6 官邸は「日本会議」の一味の巢 林

自由吟 (互選) 一人5句以内吐

年号は民衆元年いかがです 一角

二島か四 否「全千島」返却を 宏

いじるなら桜田さんよりアベさんを 未知子

税でなく万博投資 勝ち組に 広助

フランスに三菱渡せぬ米の裏の手 立東爺

実習生いつ実習して国帰る 一角

原発の安全想定内なら自信あり 立東爺

ペテン師ゴーン一揆でコロリと行きそうな 大峰

カルロス氏名声哀れ gone ゴン 未知子

臭ってるゴーンで隠す超悪事 白真弓

最若手七二歳の朝の棚田 白真弓

ロシアでは不凍港は返さない 一角

誕生のヒト非核など持っていない ダン吉

隠蔽の事実で官邸つぶれそう 林

オスプレイ 反対の声 前進へ 宏

1 自国第一脳裏を過ぎるセカイセン 未知子

1 全山を染めるパワーに黙りこむ ダン吉

1 大臣にウイルス入る余地もなし 徹乗

1 消費税一割上乘せ辛さある 和子

1 再稼働 司法姿勢 正義なし 宏

1 悪法作る度資料改ざんして隠す 大峰

2 フクシマで被曝こつそり首となる 亀公子

2 大臣は即答よりもおべんちゃら 一角

2 二年後は歩道の下に核瓦礫 和子

2 威張りすぎて自動車王に成そこね 大峰

2 安倍配下能無し大臣勢ぞろい 和子

2 アメリカを守るミサイルお買い上げ 徹乗

2 新元号 昭和の身分 遠くなる 広助

2 この次は一強引きずり落とす時が来た 大峰

2 浪江町妥当な金を東電出せ 和子

2	八百長はなし稀勢の里今日も負け	ダン吉
2	核禁止アメリカこそが核禁止	和子
2	唄われた川や野山はキズだらけ	立東爺
2	強盗の親分憲法変えたがり	一角
2	振り向けばウソ言い訳の反故の山	白真弓
3	技能実習生母国で使えぬ技学び	白真弓
3	軍拡へ三段飛びの防衛費	亀公子
3	安倍カラー変節とげて黒づくめ	亀公子
3	かすみ取りゴーンに貢ぐ労働者	広助
3	国民は9条抱きて今日も生き	林
3	移民国移民排斥どこの国	未知子
3	ボーっとしてんじゃないよ日産よ	未知子
3	武器ならば言い値で買います予備費あり	立東爺
3	ごまかしのあの手この手で消費税	広助
3	アベ・ゴーン氏一強おごりウソと不義	宏
3	辺野古基地 工事ありきの 民意無視	宏
3	少子化のツケ回された外国人	徹乗
3	アベ色に染めようとする戦後色	林

4	政権は 万博の矢で 民煽る	広助
4	完璧な国防説いてる第9条	林
4	原発の消費期限は後で決め	立東爺
4	二島だけ追って千島を奪われる	林
4	西暦で生きる年号気にしない	ダン吉
5	徴用を募集といい繕ろって	一角
5	介護の果て哀しい記事に今日も会う	ダン吉
6	憧れの国でこき使われる実習生	徹乗
8	土砂投入ジュゴンの海に死の呻き	亀公子

◆ほのぼの川柳《投句紹介》

・子育ては我満辛抱修行かな

神田 鯛

バイト先の福祉施設の若い同僚に川柳を解説していたら、彼の口から出た川柳。七歳と五歳、二人の子育て真つ最中。

翌日、ベテラン職員からメモ紙をもらった。川柳が書いてあった。

・ガラになく夫をなぐさめ妻スマホ 真人我

こんな生活川柳が集まると、ほのぼのの川柳コーナーが出来そうですね。(周)

今月の

自選・連作

◆ 闘病句 白真弓

あゝ一年鉄冷たく首に触れ
朝毎に喉の違和感抱きしめる
トントんと登って青空見上げたよ

◆ 連作 立ちん坊 遠田亀公子

たどたどし日本語駆使し立ちん坊
実習生異国の空でひさぐ春
母国には送金を待つ飢えたくちばし
帰るにも居るにも酷な戦力外
首の皮一枚残す不法滞在
闇に咲くおしろい花は他国籍
新しい慰安婦像が建つ国に

◆ 自選句 中野林

改憲で「戦争放棄」止めにする
侵略の罪の深さに目もくれず
国民の消費消しに行く消費税
戦前に立って戦後を攻撃す

アベ色が際立ち過ぎてアベ隠し
企業に漁場荒らしの特権付与
トランプの使い走りに今日も堪え
トランプがアベシンゾウを振り回す
国会で「暴言タロ」は今日も寝る
暴走の行き着くところアベ退陣

◆ 自選句 岩原一角

(秋山茂氏に思う)

泥炭に砂利を敷いた日曜日
一の橋二の橋順に作らされ
ユートピアこの世にはない絵空事
夢の国夢の世界でなかったか

◆おたより & 川柳雑感

みなさんの句を読んでいて、自分の句を添削したくなりました（アッハッハ）。

最若手七二歳の朝の棚田

←

最若手七二歳の棚田守

この方が落ち着くし、何のことか分かります。勉強になります。

実は、カッコつけて、「朝」なんて使ったのです。

闘病句では、少し

・あゝ一年^{はさみ}缺冷たく首に触れ

ちようど一年前に病気が発見され。脱毛したときに長いと目立つし、気持ち悪いので、11月24日にカットしました（金沢の行きつけの美容院で）。それから髪が抜け、ゼロからの出発です。髪がないとこんなにも寒いのかと、寝る時も姪がつくつていたタオルの帽子をかぶっていたし、家の中でも帽子をかぶり、外出時はスカーフを巻いてい

ました。

一カ月、二カ月と経ち、少しずつ伸びて、9月くらいからベリーショート位になりましたが、まだスカーフが離せません。

そして十一月、襟足の伸びた毛が気になるようになり、ついに自分でそのあたりをカットしたのでした。

以前から襟足は自分でカットしていたので慣れてはいましたが、その缺の冷たさが、何とも感慨深かった訳です。

・朝毎に喉の違和感抱きしめる

私の腫瘍は治療では活性化部分は小さくなったものの、それ自体の大きさは、見た目では変化がありませんでした。

以前には感じなかった、のどの違和感が最近よく感じるようになりました。成長しているのかもしれませんが、医師はこの腫瘍は成長がゆっくりだからと言います。それを信じて、ストレスがな

いように生きたいのですが……。

・トントんと登って青空見上げたよ

長期の入院に加え年齢的にも筋肉が落ちています。

都会は地下鉄などの階段が多く、月いちで行く会議の場には、ビルの3Fくらいの階段を登らなければ地上に出られません。それが回復のバロメーターになっていました。11月の会議の日、途中で休まずに登り切れたのです。そして見た青空です。

◆投稿 岩原一角

11月5日夕刻、大阪の日川協・番傘川柳本社の大幹部、本田智彦さん、森中恵美子さんのおふたりを卯辰山の鶴彬句碑に案内した、共に高齢の方のため、乗りごごちのいいレンタカーを借りて乗っていただいた。ちょうど高岡

鶴彬没後80年！ 大阪では12月 鶴彬の生涯を描いた 演劇が上演されます。

劇団きづがわ創立 55 周年記念・第77回公演

『鶴彬 暁を抱いて』

12月15日(土)/16日(日)

(協賛：あかつき川柳会／後援：全日本川柳協会)

前売り：一般 3000 円

(65 歳以上 2500 円) /U30、障害者 2000 円

(当日 +500 円)

連絡：TEL. & FAX.06-6551-3481

《携帯》090-7359-7335

今年は、鶴彬・獄死八〇年。この演劇は古橋道夫原作の同名小説をもとに「川柳をたたかい抜いた鶴彬の半生を劇化したものです。

劇団きづがわ創立55周年記念・第77回公演
劇フェス2018大阪劇団協議会フェスティバルNo.46



鶴彬「暁を抱いて」

原作 古橋道夫 脚本 佐伯洋 西村康悦 松本喜久夫 演出 林田時夫

暁をいだいて闇にも雷
枯れ芝よ！団結を
手と足をもちだれ
春を待つ
ししてかえ
るこ
目がつき

2018 12/15 (土) 11:30 / 16:00 / 16 (日) 14:00

リバティーおおさか
(大阪人権博物館)

前売り/一般3,000円/シニア(65才以上)2,500円/U30・障害者2,000円(当日500円増し)
後援 一般社団法人日本川柳協会

でねんりんぴつくと日川協の常任幹事会があった
帰途である。

この訪問は、もともと森中さんの要望で実行したのだが、彼女は故時実新子さんと極めて親しく、卯辰山の「暁を抱いて闇にゐる蕾」の句碑の話を聞いておられたのだ。ともに、この句は平和の句だとおっしゃる。

平和の句というと、つい「平和」という語句を織り込んだ句を連想するが、こういう含蓄のある句が日本人の魂を揺さぶるのであろう。この点は川柳の幅として、よく考えてみる必要がある。

本田さんからは建立の経緯について「こんな見晴らしのいい場所をどうやって手に入れた」と訊ねられた。国会議員なども動かして、場所を確保したようだとお伝えした。そういう幅の広い取り組みが、今各地に広がっている建立運動にも求められる。ただ、山道はやっぱりご高齢のおふたりにはたいへんだったようだ。(岩原茂明記)

戦争が描かれない

プロレタリア文学運動の盲点

周 立東爺

九月の会報(2018_9_No672)に「戦争が描かれない戦時下の文学——プロレタリア文学運動の盲点」なる問題提起をさせてもらった。

これは、戦争責任をテーマに文学を研究している高橋隆治(1925生まれ『昭和萬葉集』編纂に関わる)の『戦時下文学の周辺』(風媒社)で「日本のプロレタリア文学は、小作争議や労働争議をテーマにしたものがほとんどで、反軍・反戦を主題にした作品は意外なほど少数だし、ストリートに反戦に結びつくプロレタリア文学はこの時期にはもやはまったく影をひそめてしまっている。」と指摘する。これを確かめたく、関連資料を集めはじめた。中古書籍中心で、かなり安く手に入る。ぶ厚い書籍がわずか一円のものもある。

戦争を描いた文学に、高橋が指摘した火野葦平『土と兵隊』がある。俘虜となった中国少年兵など三十六名のその後のことを火野は戦後、版を新しく復活している。

解説にそって紹介すると、この『土と兵隊』は昭和十三（1938）年十一月号『文芸春秋』に発表された。その当時のインテリの心情を解説者の河盛好蔵は次のように書いている。

「当時の私は中国との戦争に対してはもちろん批判的ではあったが、戦地に送られ、そこで悪戦苦闘する日本の兵隊には心から感謝し、また同情していた。」

火野葦平は序文に「……私は戦争のなかで、盲目のごとく、なにもわからなくなりました。私が、戦争を文学としてとりあげることの出来るのは、戦争が終わって、歳月が経ったずっと後のことです。この作品は単に一兵隊の狭い体験を書いた戦場記録にすぎないものであって、小説ではありません

せん」と書き、また別の文章に「書きたいことが一杯あるけれども、検閲と弾圧がきびしくて、どうしても書くことを許されない。ここに表現されているのは、書きたいことの十分の一にすぎない」と記しているが、上記の「復活」した部分が『土と兵隊』で検閲で削除された部分かもしれない。

復元『土と兵隊』欠落部分

旧版と新版を入手し確認した。以下がその初版で載せられず欠落していた部分である。欠落部分の少し前から紹介してみよう。

× × ×

（民家裏のトーチカを襲撃する場面から）

トーチカの上に三つ空気抜きがあった。私達はそこから手榴弾を入れることにした。安全栓を抜き、発火させて、幾つもそのパイプの中に手榴弾を転がし込んだ。轟然と音立てて手榴弾は作裂した。私は兵隊に、扉の一個所を照準して続けさま

に弾丸を射ちこませた。厚い扉はびくともしなかった。兵隊は大きな石をぶつつけたが矢張り駄目だった。私は扉の前に立つて扉を叩いた。銃把でごとごと叩いた。それから、活字がないため、来々、出て来い、と云った。私の知っているたった一つの支那語だ。●、来々、と私は何度も叫んで扉を蹴った。そうして耳を澄したが、暫く何の返事も無かった。すると、ようやく、話声のようなものが聞え始め、此方に向つて支那語で話しかける声が聞え、中から扉が開いた。私は用心して銃剣をそこへ擬した。中から汚れくさった顔をした支那兵が覗いた。あまりに近く敵兵の顔を見て、私は一寸ぎよつとした。支那兵は何か竹を振りながら、私の方に銃を向けた。すぐに銃を倒さかさまに持ち直して差し出した。次から次に銃を出して来た。驚いたことには、次々に小銃や拳銃の数は三十挺を越えたのだ。来々、出てこい、と私は手振りて振りで云った。次々に支那兵が出て来た。どれもひ弱そうな若い兵隊だった。

(中略)

もう居ないだろうと思っていると、私は暗闇の中で、大声で呻うめいている声を聞いた。瞳を凝らしてみると、中央の土間に何か黒い者が蠢き駆け廻っているのを見た。私は銃剣を構えて、それに近づいた。手榴弾でやられてのたうっているであろうと思つたのだ。人口の近くには既に二人死んでいた。私達が近づくと、その呻き声は一層はげしくなった。然し、それは呻き声ではなかった。それは泣いていたのだ。

(中略)

私は暗闇からにゅつと銃眼の光の中に出た兵隊の顔が、あまりにも若く美しかったので、どきりとした。二人とも同じ位若く、殆ど少年であつたのだ。しかも二人とも女かと見まごうばかり美しかった。二人は顔を泣き腫らし、私の肩に両方からより縋すがった。彼等は何か云い始めたが、無論、私には判らなかつた。一人の兵隊は、ポケットか

ら手帳を出し、頁を繰って私に一葉の写真を示した。それは母の写真かと思われた。彼等の云うことは無論私には充分に想像された。

二人は兄弟かも知れぬと私は思った。私はふいとこの二人だけはここに残して行こうかと考えた。然し私は両肩にぶら下るように縋る二人の兵隊を連れて表へ出た。兵隊はしきりに首に手を当てて、殺さないでくれ、と身振りをした。私は、よしよし、というように首肯いた。少年兵の悲しみにつづれた顔に、かすかな喜びに似た影がかすめたように思った。私は胸の中に説明しようのない、淋しさとも、怒りともつかぬ感情が渦巻くのを感じた。

(以下は、復元した部分)

横になった途端に、眠くなった。少し寝た。寒さで目がさめて、表に出た。すると、先刻まで、電柱で数珠つなぎにされていた捕虜の姿が見えない。どうしたものかと、そこに居た兵隊に訊ねると、皆殺しましたと云った。

見ると、散兵壕のなかに、支那兵の死骸が投げ込まれてある。壕は狭いので重なり合い、泥水のなかに半分は浸かっていた。三十六人、皆殺したのだろうか。私は黯然とした思いで、又も、胸の中に、怒りの感情の渦巻くのを覚えた。嘔吐を感じ、気が滅入って来て、そこを立ち去ろうとすると、ふと、妙なものに気づいた。死骸が動いているのだった。そこへ行つて見ると、重なり合った屍の下積みになって、半死の支那兵が血塗れになって、蠢いていた。彼は靴音に気附いてか、不自由な姿勢で、渾身の勇を揮うように、顔をあげて私を見た。その苦しい表情に私はぞつとした。彼は懇願するように眼附きで、私と自分の胸とを交互に示した。射つてくれと云っていることに微塵の疑いもない。私は躊躇しなかった。急いで、瀕死の支那兵の胸に照準を付けると、引金を引いた。支那兵は動かなくなった。山崎小隊長が走って来て、どうして、敵中で無意味な発砲をするかと云った。どうして、こんな無惨なこ

とをするのかと云いたかったが、それは云えなかった。重い気持ちで、私はそこを離れた。

× × ×

以上が火野葦平の「土と兵隊 杭州湾敵前上陸記」の初版で、著者が載せることができなかった部分である。

ちなみに、この作品が発表された昭和十三(1938)年はどういう年か。ご存知、鶴彬が獄中にて没した年である。参考に鶴彬の絶筆の句となつ

た六句を掲載しておく。

- ・ 高粱の実りへ戦車と靴の鉾
- ・ 屍のゐないニュース映画で勇ましい
- ・ 出征の門標があつてがらんだの小店
- ・ 万歳とあげて行った手を大陸において来た
- ・ 手と足をもいだ丸太にしてかへし
- ・ 胎内の動きを知るころ骨がつき

当時、戦争がどう描かれたか、『土と兵隊』と鶴彬の作品群とを対比して欲しいと思う。(つづく)



取り調べはわたしの渡満以来今日までの経歴と職務内容に就いての訊問だが既に昭和七年以来十三年間も在満しているわたしに昔の年月日を思い出すこ

とは不可能に近く記憶を辿り乍ら概要の経歴を述べたが、わたしは●芬河(注:活字がないので●)をはじめ牡丹江や佳木斯鐵路警備団で警察主任であった事実の暴露が「一番危ない」と直感したので自ら北支派遣鉄華部隊第一營の副官であったことを申出て彼の注意心をこの方面に集中さすことに成功した。若しこの時わたしの警察主任がばれていたらわたしは銃殺刑に処せられていたことだろう。というのは

帰国後知ったのだが、当時哈尔滨鉄路警護団の警察主任であつた知識尚夫（同期生）氏は逮捕後間もなく銃殺されていたからである。

その次にわたしが主張したのは、

「私は満州国陸軍の将校である。然しソ連は満州国が独立国であることを認めていないのだから貴官が私を将校として逮捕したのであれば夫れは満州国の独立を自ら認めたことである。独立国家の将校と認めた上での逮捕なら戦犯としての処分も仕方がないが、〔満州国の独立を認めない〕というなら貴官にとって私は将校でも戦犯でもない」と。

逮捕直後から既に覚悟を決めていた私はこの主張を繰り返し夫れからも二日間連夜の取り調べにこの若いソ連軍中尉と論争し、彼はある時は威嚇的に、ある時は宥めるように手を代え品を代え私を将校として捕らえられたのだと納得させようとし、一度は拳銃を逆手に振り上げたこともあつたが、殴ることはなく私は最後までこの主張を曲げなかつた。

そのためかどうか、結局私にとってはほろ苦い思いのする日本軍の陸軍兵長ということでシベリア送りとなつたのである。

逮捕されて以来四日目の午前十時頃私は留置場から出て面識のない日本人十五名ばかりと馬車五台に分乗したが太陽が凄くまぶしく行き先は勿論分からない。馬車は縦隊となり各馬車の両側に小銃を担いだ中国人の保安隊員二名が徒歩でぴつたりとつき日本軍から押収した防寒ジャンパーを着ているので階級は判らないが、小柄なソ連軍将校が一名乗馬で後ろになり先になりして指揮をしていた。

この日も天気は快晴に近く吹く風は頬に痛い。馬車は旧商埠地から小西辺門に出て満人街を抜け、やがて満鉄本線のガード下を通り北陵街道に向かつたが此処がその昔張作霖を爆死させた拠点である。広い北陵街道を南下したけれども、日本人の姿は何処にも見掛けなかつた。

こうして到着した処が昔懐かしい旧東北大学であ

つたのも運命の皮肉のように思われた。

ここは旧奉天日本人居住区の西南方約十キロ余りの処にあつて観光地として有名な北陵の杜に隣接して張学良が建てた国立大学で、通常東北大学とよばれ広大な敷地に当時としては珍しい専用グラウンドを持ち、洋風三階建ての本館や教室の外、図書館など数棟が点在するという豪壮なものであつた。

一九三三年すなわち昭和八年九月当時独立守備歩兵第六大隊のいち上等兵であつた私は、中隊長の峯岸兼吉大尉に指揮され、大学構内の一棟に起居し約半年に亘り親友鈴木叶上等兵と共に初年係の助手として新兵教育をした処で教官は後藤中尉、助教は篠原伍長、兵隊は全員北海道出身者がかりであつた。

然しあれから既に十二年経っているが、今見る正門の大きな鉄柵や建物のたたずまいは昔のままであつたけれども、外周や構内の道路脇に植えられていた楊柳が一段と太く逞しく成長し歲月の経過を物語

つていた。衛兵所脇の一室でソ連軍女軍医の立ち会いで形式的な日本軍軍医の後、収容所の建物に入つた処、現役在郷軍人（市民）警察官、開拓義勇、開拓義勇青少年団員日滿軍將校、滿州国官吏など、実に雑多な人達で混雑していたが、現役兵を除けば大半は狩り出しに依つて捕らえられた市民達であつた。というのは滿州に進入したソ連軍は関東軍の兵力を七〇万と読んでいたらしく、大半が在滿邦人の召集兵であるという事実の誤認もあつて何がなんでも「七〇万の日本軍捕虜と」という考えから員数合わせのため「日本人を捕虜に」ということになつたのであつて戦争に直接関係のない市民を「使役」と称して狩り出してはそのまゝ捕虜として抑留するなど如何にもソ連ならではの感が深く、他に例のない暴挙であつた。

私は早速大石という滿軍中尉の下で被服係となりソ連軍が押収した軍用被服の分配などしているうちに大体次の様な状況が分かつてきた。

1 千名単位を以て一大隊としてシベリヤ方面に送り出していること。

2 員数不足は奉天市民や開拓団の青少年などで補充していること。

3 大学外周に張られた鉄条網の外側通路にはソ連兵が動哨し近接すると射撃し逃亡に失敗した日本人の死体が毎朝必ず二、三体道路に転がって居ること。

4 南側の鉄条網を潜り一気に北陵の森に入れば大体安全だが西北側の満人部隊に入った者は殆んど殺されていること。

5 脱走者は若い現役兵が多いこと、など。

收容所に起居すること五日にして第五九大隊三中队二小隊の第二分隊長と輝いた十一月二十五、六日の午後九時頃で隊列は四列縦隊であった、收容所の門の附近に差し掛かった時、何やら泣き叫ぶような声に目をやれば今まで所内の何処に居たの

か夜目にも陸軍病院の看護婦と判る白衣の一団があり、彼女達が涙を流し盛んに手を振って見送っている姿に深い感傷に包まれ一条の涙が頬を伝って落ちた。

私は心の中で此処からは可成り遠い朝日街の満鉄社宅に遠い東満の佳木斯市ジャムスから幼い四人の子供を連れたのが数人来て友人のところまで世話になりながら私の帰りをまつているのであろう妻と四人の子供に最後の別れを告げた。

我々の両側をソ連兵が五〇米位の間隔で歩いていてそれでも乗車した北奉天駅に着くまでに月光に照らされて明るい反面真っ黒い家屋の陰影を利用して何人かの人が脱兎のように暗闇に飛び込んで逃亡、その度ごとに激しい銃声が鳴り響いたが何人が生き延びたかは知る由もなく促されるまゝ追われるように歩いた。

(次号につづく)

◆なかなか思い通りに句にまとまらない。以前紹介したことがあるが「川柳心得」なるものを作り壁に貼り、それを見ながら推敲している。参考までに再掲します。

…《川柳心得》…

「吐くテーマ」が決まったら、次に「吐き方」を考えようではないか。

- ・真実を語っているか？
- ・散文になっていないか？
- ・スローガンになっていないか？

12月例会ご案内（毎月第4月曜日）

◆12月24日（月） ◆×切：22日（土）

- ◆課題「凍」 3句以内 ◆自由吟：5句以内
- ◆自選吟、連作、エッセイ、川柳論、ご意見などもお寄せ下さい。
- ◆会場：金沢市金石（乞ご連絡）
- ◆句報を持参下さい。例会で話し合います。

- 投稿 FAX(076) 254-0762
- メールアドレスは下段に。

郵送は
下段住所へ。

- ・標語になっていないか？
- ・リズムが心地良いか？
- ・諷刺が効いて寸鉄になっているか？
- ・他人に伝わるか？
- ・共感を得るものか？
- 声に出して読んでみる。
- よく響くか？ こち良いか？
- ◆12月15日（土）、大阪の『鶴彬暁を抱いて』の観劇に参加します。東京からも川柳仲間が参加する由。再会が楽しみです。（周）

◆編集後記

◆投句の選考は普通自分の句ははずすのだが、自作句を選ぶ方もおられる。偶然選ぶこともあるでしょうが、「民主選考」が建前なのでこれいかがでしょう？ 議論のテーマですね。（編集子）

和 川 柳 社

////////

金沢市金石東2丁目 15-30（渡辺 方）

電話 FAX：076-254-0762 PC-mail：kananabe@popolo.org

携帯：090-9445-1302 携帯 mail：kan-wata@i.softbank.jp

振込先：北國銀行中央市場支店 #191 普通 640「和川柳社」